

2025

9.3 (水)

12:10  
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン  
(Zoom)

登録はこちら▶▶

[https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN\\_ElUbiBu7T8W7rFVD81ZL5Q](https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_ElUbiBu7T8W7rFVD81ZL5Q)

【技術支援】九州大学 Q-AOS

## 神話から事実へ：

脳の健康と精神的健康に対する天然製品のメリットと科学的根拠

3 すべての人に  
健康と福祉を5 ジェンダー平等を  
実現しよう9 産業と技術革新の  
基盤をつくろう10 人や国の不平等  
をなくそう11 住み続けられる  
まちづくりを16 平和と公正を  
すべての人に

## Key Words

システム生命

神経情報科学

天然製品

ウェルビーイング

嗅覚シミュレーション

心理生理学

ゼニファ ファディラ 特任助教

九州大学 農学研究院 環境農学部



ゼニファ氏は現在、農学研究院の特任助教として勤務しています。インドネシアの小さな町で育ちました。そこでは、ヘルスケアなどの技術があまり普及していませんでした。彼女は、発展途上国における技術の普及を支援したいという思いから、センサー、人工知能、神経情報科学を含むシステム開発の学問分野を追求してきました。2020年に九州大学大学院システム生命科学府で博士号を取得しました。その後、九州大学先端核融合研究センターで2年半働きました。また、さまざまなジャーナルの査読者にもなっています。現在、天然資源に関する科学的証拠の発見と健康のための機能改善に貢献するため、天然資源における人間の心理生理学変化を調査するシステムを開発しています。

特定の香りが思考力や気分を向上させるという通説は、どの国にも広く浸透しています。しかし同時に、香りの潜在的な悪影響を回避するためには、その機能を証明する必要があります。私たちの研究グループは、空気中に放出される特定の化学物質が脳や精神衛生にどのような影響を与えるかを明らかにしようとしています。また私たちは、系統的森林・林産物科学研究所に所属しており、香りに関するプロトコルの開発と試験は、科学的根拠を提供するための重要なツールであると考えています。私たちの探究的な取り組みは、人間の幸福に関する研究や生物多様性の損失軽減など、様々な用途に活用できる可能性があります。本セミナーでは私たちの研究グループが行った様々な研究成果を発表します。香りから放出される揮発性化合物と、様々な生活場面における脳や精神の健康への影響との関係性を明らかにするためのアプローチについてです。

## Brown Bag Seminar No. 202

2025

9.10 (水) 12:10  
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン  
(Zoom)

登録はこちら▶▶

[https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN\\_lwKRTAnFQTSqgZKGi0Fcpgg#](https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_lwKRTAnFQTSqgZKGi0Fcpgg#)

【技術支援】九州大学 Q-AOS

「大気環境科学」×「農業経営」  
で沖縄県の窒素肥料量を最適化する  
スマートアグリの開発

## Key Words

大気科学

牧草

窒素負荷量

島田 幸治郎 助教

琉球大学 理学部 海洋自然科学科

東京農工大学連合農学研究科にて博士（農学）を取得。博士課程では、畠山史郎教授の指導のもと、国立環境研究所の高見昭憲博士との共同研究により、大気化学および環境科学の研究に従事。これまで、東京農工大学や早稲田大学、琉球大学で助教を歴任し、日本国内での教育・研究活動に加え、台湾の国立中央大学および国立台湾大学でも招聘教員として国際共同研究に携わってきました。

東京農工大学では化学システム工学科やグローバルイノベーション研究機構にて助教として勤務し、東京都環境科学研究所では研究員として大気環境に関する研究に従事。2017 年から2020 年までは早稲田大学創造理工学部にて助教を務め、2020 年 4 月より琉球大学理学部（化学・生物・海洋学科）に着任。2025 年には台湾大学にて University Academic Alliance in Taiwan (UAAT) 国際若手招聘研究者プログラムの一環として招聘を受けました。

環境化学および大気科学の専門性を活かし、環境保全やアジア太平洋地域における国際的な科学技術連携に関する学際的研究を推進。これまで国内外の大学や研究機関と連携しながら、幅広い教育・研究活動を展開しています。

プラネタリーバウンダリー（地球の限界）とは、地球の環境がこれ以上悪化しないための“安全な範囲”を示す考え方です。

2023 年の報告では、その中の『生きもののつながり（生物圏の一体性）』という項目において、化学肥料の使いすぎや空気の汚れによって、海や土に多くの窒素が流れ込み、地球にとって危険なレベル（レッドゾーン）を大きく超えてしまっていることが明らかになりました。そこで私たちは、空気中から牧草地（牛などの家畜が食べる草を育てる土地）にどれくらいの窒素が降り注いでいるのかを調べました。また、野外で実際に牧草を育てる実験を行い、化学肥料とたい肥（家畜のふんなどから作られる自然な肥料）それぞれが、環境にどのような影響を与えるかも比較しました。

その結果、空気中から牧草地に入ってくる窒素の量は年間 1 ヘクタールあたり 17.5 キログラムで、これは化学肥料でまく量の約 4.5% にあたるということが分かりました。

沖縄では、大気からの窒素の影響は比較的小さいと考えられています。そのため、たい肥をうまく使って土地にしっかりと栄養をとどめ、40%は島の中で再利用し、残り 60%は島の外に運ぶという“地域内循環”のモデルを使うことで、海への負担を大きく減らすことができると評価されました。

本セミナーではこれらの研究について分かりやすく説明いたします。

2025

9.17

(水)

12:10  
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン  
(Zoom)

登録はこちら▶▶

[https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN\\_rkXp-FRYQPq32FGkLgHn9w](https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_rkXp-FRYQPq32FGkLgHn9w)

【技術支援】九州大学 Q-AOS

# 未来のための考古学



Key Words

社会考古学

物質文化

社会構造

弥生時代

溝口 孝司 教授

比較社会文化研究院 環境変動部門



1963 年生まれ。ケンブリッジ大学博士課程修了(Ph.D.)。専攻は理論考古学・社会考古学。事例研究のテーマは葬送行為、物質文化と社会構造、考古学と現代社会。カバーする地域・時代は主に日本弥生時代、ヨーロッパ新石器・青銅器時代。現代社会の中で考古学が果たす役割を追求する「社会考古学」を提唱・実践している。現在世界考古学会議(WAC)会長、日本イコモス国内委員会副委員長、九州考古学会会長を務める。2025年、日本からは9人目、考古学者としては初の英国学士院国際会員に選出された。著書に、『The Archaeology of Japan: the Earliest Rice Farming Villages to the Rise of the State』(Cambridge University Press 2023)、『社会考古学講義: コミュニケーションを分析最小基本単位とする考古学の再編』(同成社、2022)などがある。

考古学は人と人、人と物、人と環境との関わりとそれらの変化について、遺されたさまざまな物的痕跡から研究する学問です。人は物を作り、物に助けられながら社会生活を営んできました。考古学的資料には、様々な社会的・自然的条件のもとで、人が生きるためにおこなった思考や行動の痕跡が刻まれています。どのような社会や環境のもとで、人がどのように生きたかを工夫を凝らして明らかにすれば、今を生きる私たちの思考や行動に活かすことのできる多くのことを引き出すことが可能です。講演では、考古学を通じて過去を読み解き、現在と未来に活かす術(すべ)について、具体的な事例を用いつつ考えてみたいと思います。

2025

9.24 (水) 12:10  
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン  
(Zoom)

登録はこちら▶▶

[https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN\\_acFb7V3mQHmTfFyDKnuEA](https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_acFb7V3mQHmTfFyDKnuEA)

【技術支援】九州大学 Q-AOS

# 社会における「真の障害」とは何か？



Key Words



共生社会

パラリンピック

パラアスリート

内田 若希 准教授

人間環境学研究院人間科学部門

1978 年栃木県生まれ。2006 年九州大学大学院人間環境学府にて博士（心理学）取得。2006 年日本学術振興会特別研究員、2007 年福岡県立大学人間社会学部助手、2009 年北九州市立大学基盤教育センター准教授を経て、2012 年九州大学健康科学センター講師に着任しました。その後、2013 年に九州大学大学院人間環境学研究院講師に異動、2020 年より現職として、教育・研究活動に従事しています。

また、2006 年より日本パラリンピック委員会心理スタッフとして、パラアスリートやコーチなどの心理サポートにも従事し、東京 2020 パラリンピック競技大会には、村外サポートスタッフとして帯同しました。

これまでに、パラスポーツをフィールドとし、①中途身体障害者における運動・スポーツを通じた自己変容プロセスに関する研究、②パラアスリートのスポーツキャリアの段階に応じた心理・社会的課題に関する研究などに従事してきました。現在は、パラスポーツが人々の顕在的・潜在的態度の変容に寄与しうるのがメインテーマに、共生社会をめぐる事象について探究しています。

2021 年に開催された東京パラリンピックを契機として、人々の意識や社会の変革が期待されていました。しかし、身体障害者に対する偏見や差別は今もなお残存しています。

共生社会の実現を阻む源泉は、一体どこにあるのでしょうか。その一つとして、社会における「真の障害」について考えていきます。そして、それを打破するための視座を、みなさんと一緒に考える時間にしたいと思います。